

# 故英国女皇ヴィクトリア陛下の偉業とパルマースト ーン卿の外交（承前）：論説

著者	長谷川，貞一郎
雑誌名	龍南會雑誌
巻	8 8
ページ	1 7 - 2 3
発行年	1901-11-24
その他の言語のタイトル	故英国女皇ヴィクトリア陛下の偉業とパーマースト ーン卿の外交（承前）：論説
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5237">http://hdl.handle.net/2298/5237</a>

耳、固能有精神、若此乎、風胡子對曰、時各有使然、軒轅神農赫胥之時、以石爲兵、斷樹爲宮室、死而龍藏、夫神聖主使然、至黃帝之時、以玉爲兵、以伐樹木爲宮室、鑿地、夫玉亦神物也、又遇聖主使然、死而龍藏、禹穴之時、以銅爲兵、以鑿伊闕、通龍門、決江導河、車注於東海、天下通平治爲宮室、豈非聖主之力、當此之時、作鐵兵、感服三軍、天下聞之、莫敢不服、此亦鐵兵之神、大王有聖德、王曰、寡人聞命矣、

## 故英國女皇ヴィクトリア陛下の偉業と

パルマーストーン卿の外交（前承）

教授 長谷川貞一郎

### 第五 女皇と卿の不和

卿の磊落淡泊の氣質と、凜然たる勇氣と、極めて厚き自信力とが、歐州諸國多數の政治家間に敵を作れるは前に述べたる如し、而して卿は又た此が爲め、女皇并に皇配の爲めに嫌忌せられたり。

卿は大事を奏上するに當り、女皇の事を解するに苦むを意とせず、常に平然として居り、又た事に就き女皇の裁可を煩はすに當り、女皇の之を否む能はざるを豫知し、恬焉として必ず其言を待てるが如き態度を示せり。又た卿は屢女皇に奏上せず、臨機應變訓令を傳達せり。此れ即ち一には女皇の頼りて以て、政を視給へる皇配アルベルト親王が、叔父白耳義王及び王の寵臣ストクマール男より其意を承け、國務に容喙すべきを憂ひたると、一には皇配の人と爲り端正にして律直、沈着にして細心、事を視る丁寧反覆再思三考の後、漸く意を決するの風ありて、卿と其性相容れざるを以

てなり。卿以爲らく外交の事たる危機一髪迅雷耳を掩ふに遑わらざる者あり、故に其判斷は、極めて迅速ならざる可からず。余の判斷は實に迅速にして、然も其の際に於ける處置と雖ども、決して其正鵠を過つ事なし。然るに余は屢女皇の爲めに事の遲滯を來し、機を逸せんとすること一再にして止らず、是れ余の常に遺憾とする處なり。抑も一國の執るべき一般の方畧分明なるの時に當り、外務の責を負へる者は、事に臨み自ら適宜の處置を爲さざる可からず。責任を重じ、職務に忠實なる外務大臣が、一片の通知を發送するに當り、一々閣員の賛成を待ち、君主の裁可を仰くは、空しく時を費す者にして、此の如き悠々閑々たる事は、外交事務の繁多ならざる一二世紀以前の時代に在ては、或は必用なりしならんも、今日の如き外交の雲行急速の代となりては、實に無益の閑事たるを免れず。然れども今日に於ても、尙ほ形式虚禮に拘泥するの必要ありとせば、外務大臣の任務を果す能はざる余は直に骸骨を乞ひ、政府は更に適任者を選び、之に外務の重任を負はす可きなりと。

此に於て、女皇は卿の輕卒躁暴の行爲を怒り、其の獨斷隨意に事を處するの弊を矯めんとし、千八百四十九年首相ラッセル卿に旨を傳へ、卿に告げしめて曰く、外務大臣は首相の監督の下に立たざるべからず、又た事件の經過を女皇に奏上せざるべからずと。此が爲め一時は女皇と卿との間に和成りしも、暫時にして卿の傲病再び發し、女皇并に閣員にして、外交の事件終局後始めて此を知る者、往々にして之れありたり。女皇乃ち千八百五十年四月皇配を介して、一書を首相に下し、外相の義務を果さざるを難して曰く、バルマー・ストーン卿が女皇に政策の目的を奏せず又た猥に之を變ずるは遺漏又は怠慢に因るにあらずして故意に之を爲すなり。而して此の故意の行動を以て原則と爲し女皇の意に反して其の所志を貫く驚くに堪へたる者あり。且つ事一旦遲滯し又は紛議を生ずれば則

ち公然之を女皇の怠懈に出るとなし、責を女皇に歸するに吝ならずと、次て同年八月女皇は又た親しく書を首相に寄せ、明晰森嚴の文字を以て、外相の君主に對する行動の標準を示せり。其の書に曰く、

“ Osborne, August 12th, 1860.

With reference to the conversation about Palmerston which the Queen had with Lord John Russell the other day, & Lord Palmerston's disavowal that he ever intended any disrespect to her by the various neglects of which she has had so long and so often to complain, she thinks it right, in order to prevent any mistake for the future, to explain what it is she expects from the foreign secretary.

She requires :

First. that he will distinctly state what he proposes to do in a given case, in order that the Queen may know as distinctly to what she has given her royal sanction.

Second. Having once given her sanction to a measure, that it be not arbitrarily altered or modified by the minister; such an act she must consider as failure in sincerity toward the Crown, and justly to be visited by the exercise of her constitutional right of dismissing that minister. She expects to be kept informed of what passes between him and the foreign ministers, before important decisions are taken based upon that intercourse; to receive the foreign despatches in good time and to have the drafts for her approval sent to her in sufficient time to make herself acquainted with their contents before they must be sent off. The Queen thinks it best that Lord John Russell should show this letter to Lord Palmerston.

時恰も卿は、彼の「ドン・パシフィコー」事件に關し、五時間に渉れる大演説を試み、二本を以て、將に倒れんとせし大厦を支へ、英國一等の經世家なりとの名聲嘖々たるの時なりしを以て、此の一書は、當に之れ青天の霹靂、傲慢にして自信深き卿に、如何なる感を與へ、卿の心情如何なりしや又察するに足るなり、然れども卿は能く自ら制し謹て譴責を請ふ、首相に一書を與へ、誓て此に違ふ勿らんと云ひ、又た入て皇配に謁し罪を謝せり。卿は舉國の輿望を負ひ、名聲嘖々たるの時に當り、何故に抗議を試み、其職を辭せざりしや、卿自ら之を解て曰く、余は不幸逆鱗を被れるも、幸に下院に於ては、顯著なる大勝を得、輿論の喝采を博せり、若し此時、職を辭せは、之れ大勝の効果を、軍門に降を乞へる敵手に譲り、據て以て大勝を得たる政友を棄つる所以なり。加之、余が突然任を退くは、是れ君主と余との紛争を、輿論の法庭に訴へて、裁決を仰くなり、其結果如何に由ては、國家に不利を來す無しとも云ふ可からず、故に此の如き無謀の行動は、若し避け得可くんば、臣子の分として、爲すべからざる事なりと、後、卿の宿痾少しく癒へたるも、未だ全治せず、終に引退の止むを得ざるに至れり。

千八百五十一年、十二月二日、佛國大統領、ナポレオン親王の非常手段を行ふや、女皇は心痛の余り、書を首相に賜ひ、駐佛英國大使、ノルマンジ―卿は、此際、虚心平氣の態度を取り、英國が大統領の策を承認する者の如く、誤解せられざる様、一言一行を謹むべき旨を傳ふ可きを命じ、首相は命を承けて、直ちに訓令を發したり、ノルマンジ―卿は、此訓令に接し、佛國外相テュルゴ―氏を訪ひ、其趣を傳へんとしたるに、テュルゴ―氏の曰く、余は已に前二日駐英佛國大使ワリユ―スキ―伯より、英國外相が、我大統領は、此策を行ふより他に手段無き者とし、此を是認せりとの報

を得たりと、ノルマンヤ卿大に驚き、直ちに此を本國に報せり。女皇並に閣員の、此報に接するや、且つ驚き且つ憤り、女皇は首相に書を下して曰く、佛國政府は、バルマーストーン卿が、大統領の非常手段を是認せる者の如く公言せるも、朕は甚だ此を疑ふ、何んとなれば朕が先きに、絶對的に、受働的に、嚴正中立の態度をとるべしと告げたる方針と、全然矛盾すればなりと、然るに女皇の疑惑は、單に杞憂たるに止らずして、バルマーストーン卿は、眞に、非常手段を是認したるなり。卿以爲らく、當時、佛國には、オルレアン黨、陰謀を運らし、大統領にして、若し此策を行はすんば、其地位殆んど危きなりと、又た曰く、駐英外國大使と英國外相間に於ける、嚴肅なる公然の談判と、私交上の談話とは、同一視す可からざるなり、余が非常手段を是認せるは、談笑の際に之を云へるのみと、然れども卿は、此辨解を以て、其責を逃るゝ能はずして、終に其職を免せられたり。此時首相の卿に送りし書に曰く、

足下、外務の衝に當れる久し、余は、足下の技量に服し効蹟を多とす、然れども足下の謹慎を欠き、禮法に悖り誤解を來せる、雷に一再ならず、終には國家の政策を毀傷せんとする者あるを以て、余が今や、足下の掌中より、外交の重任を奪ふの止むを得ざるに至れるは心外の至りなり。

卿か女皇に嫌忌せられ、首相の爲めに駕馭せられざりし此の如し、然れども卿か國家多事の日に當り、英國の威信を維持せる政界の一偉人たるは争ふ可からざる事にして、一政府か、政府として、存在し得たるは實に卿ありしが爲めなりしなり、故に卿の退任せる政府は、其右手を失ひしと一般にして、僅に三月を経て瓦解するに至れり。

## 第六 卿の東方問題に對する意見

千八百五十二年、二月、ラッセル内閣倒れ、デルビー内閣組織せられたり。此内閣は、口善惡なき京童が“Who? Who? Ministry”と嘲り、“Who? Who? Government”と罵り、バルマー・ストーン卿が、デルビー、デズレリー、二人を除けは、他は之れ斗屑の一團のみと評せる内閣にして、同年十二月を以て倒れ、アバーデーンアバーデーンの聯立内閣此れに代り、バルマー・ストーン卿は、入りて内務大臣と爲れり。

此時に當り、殘虐にして野心深き露帝ニコラス一世は、千八百四十四年、ピール内閣の際、失敗せる東方問題を再び提議し、千八百五十三年、正月、駐露英國大使、サー、ハミルトン、シーモアに語りて曰く、吾人の掌中に瀕死の病者あり、如何に彼を葬送すべきやの同題、吾人の間に調はざるの前に死する事あらば、此に優る不幸あるべからず、若し吾人の間に、確乎たる協商の成立するあらば、列國の行動を度外に措くも不可無しと、而して英國の之れに賛成を表せざるに拘はらず、此年四月を以て、メンシコッフを土都に遣はし、七月ルーマニア地方に兵を進むるや、英國の人心沸騰し、十一月に至り、土國の露國に宣戦し、翌年十一月露軍のシノーブに土國の艦隊を敗るや、英國の輿論は、アバーデーン内閣を攻撃し、英國の外交政畧の化身たる、バルマー・ストーン卿は、何故に、内務の椅子に悠然安座し、議員或は有志家を滑稽諧謔の間に翻弄し、自己自然の義務を忘却せるや、國家は、卿に待つ事なくして、如何に其進路を定めんとするやとの世論、囂々として起れり。

然るに、此言未だ終らざるに、果然バルマー・ストーン卿は撰擧法改正案に關し、閣員と其意見合はざるの故を以て職を辭せり、然れども其實、卿の東方問題に關する意見、閣員と異なるを以ての故なり。此に於て閣議卿の説を容れ、卿を職に復し、ナポレオンの提議に従ひ、英佛の連合艦

隊は、千八百五十四年、正月を以て、黒海に入り、越えて二月、英國は最後の通牒を露國に送り、此の時、閣議二に別れ一は首相並に虞翁の徒にして、出來得る限り、戰を避け、以て土國の耶蘇教徒の安全を保護するを主とし、一はバルマーストーン卿の徒、換言すれば、卿の土耳其保全を主張するは、英國國民たる者の一義務なりとの言を奉し、一戰以て露國を倒し、土國を保全せんことを欲するの徒なり、然り而して露國は終に、英國の最後の通牒に答へざりしを以て、英國は三月を以て、露國に戰を宣し、十一月、インケルマン、バラクラバの役に於て、英國の輕騎隊は、欽定詩崇の爲めに、其名を留めたるも全軍利を失ひ、アバーテーン内閣望を失ひ、バルマーストーン卿代て内閣を組織せり、此れ卿の第一回内閣なり。《完》

## 詩人屈原

其二

教授 兒島 猷 吉郎

凡そ人身中、純潔にして貴ふべきは血と涙とぞかし。古來幾多の志士、勇士の行動は皆熱血に基因し、詩人文人の筆の迹には涙の痕の留まるもの多し。思ふに人の勇膽義烈、事に當りて屈せず、物に應じて懼れざるは血なり、慷慨、淋漓、憤懣、激越、進んで取り、取りて代るも亦血の作用なり。惻隱の情は涙の源泉なり。博愛の仁は涙の潤澤なり。多恨多戀は涙の反影なり。故に眼底に涙なきの人は常に刻薄にして不仁なり。皮裡に血少き人は槁木の如く、死灰の如く、冷淡枯瘦に失するにあらざれば、必ず儉懦因循に陥らん。而して美人一滴の涙は時に勇士の鐵腸を銷鑠し、勇士満身の血は彈雨硝煙を物ともせずして、能く千軍萬馬の間に出入せしむ。しかも又涙多きは美人のみなら